

里地里山の保全・活用の取組における課題と技術的方策等

分類	計画策定と実行プロセス／保護保全
手法名	野生生物の保護と農業のための3つのゾーニングによる共生プラン
主体	特定非営利活動法人オオタカ保護基金
背景(地域の課題)	<p>里山のタカとして知られるサシバをはじめとする里山の野生生物の保護・保全のためには、水田など従来からの農耕地がきちんと耕作され管理されていることが生息地の保全上重要である。</p> <p>しかし、現今では特に野生生物の生息密度が高いとされる谷戸の水田(谷津田)が生産性や地域の高齢化等の問題に起因する理由から放棄される傾向がある。</p> <p>野生生物の保護保全と農業の共生という視点からどのように人々がかかわり生息地保全していくことができるのか、その方向性を提示するプランニングが求められている。</p>
手法／方策の詳細	<p>特定非営利活動法人オオタカ保護基金による栃木県市貝町における調査では、幅の広い水田地帯よりも幅の狭い水田地帯(谷津田)の方がサシバの生息密度が高いことが明らかにされた(図1)。調査結果を踏まえ、エリア特性に応じて3つのゾーニングを行い、それぞれの特徴に応じた主体のかかわり方や保全策の方向性について類型化し検討している。</p> <p>(1)広域水田－農業エリア－(図2)</p> <p>①エリアの特徴 稲作という点では生産性・効率性が高く、今後も継続されていく可能性が高い。一方でサシバの生息密度は比較的低い。</p> <p>②保全の方向性 可能な範囲で生き物に適した圃場の構造や工法を採用するなど、生きものの生息に適した一定の配慮を行っていく。</p> <p>(2)中規模谷津田－農業と生き物の共存エリア－(図3)</p> <p>①エリアの特徴 稲作は継続される可能性が高いが一部は放棄される懸念もある。サシバの生息密度は比較的高い。</p> <p>②保全の方向性 野生生物が生息している自然豊かな圃場として、ブランド米など付加価値の高い農産物生産ができる可能性がある。保全団体は、市民(消費者)と生産者をつなぎ、生産物の販売を援助・促進していくことで、自然環境と農業の双方の保護保全に寄与することが期待される。</p> <p>(3)小規模谷津田(生き物エリア)(図4)</p> <p>①エリアの特徴 耕作放棄地が増加している地域。一方でサシバ等の野生生物の生息密度は高い。耕作放棄地の増加に伴う生息数の減少が危惧されている。</p> <p>②保全の方向性 所有者から土地を借りるなどして、保全団体が主体となり、適度な管理を加えることで多様な生き物の生息地として保全していく。</p>
手法・技術的視点	<p>里地里山における野生生物の保護や生息地の保全のためには、地域の農業との共生的視点が大切になる。本方策ではこの視点のもとに、野生生物の生息特性に応じたゾーニングの基本的な考え方について調査結果を元に明示するとともに、それぞれのゾーン別に保全活動の中心となるべき主体についても提案している点で着目される。</p>

<p>実行プロセス・運営体制のイメージ</p>	<p>サシバ等の里地里山の野生生物と農業の共生プラン(3つのゾーニング)</p> <p><b>広域水田</b> (農業エリア) 農業事業者を中心とした環境配慮型の営農活動の推進</p> <p><b>中規模谷津田</b> (農業と生き物の共存エリア) ブランド米など付加価値の高い作物生産による耕作地の維持と保全団体が連携した販売促進</p> <p><b>小規模谷津田</b> (生きものエリア) 保全団体を中心とする野生生物保護を主目的とする保全・管理</p> <p>里地里山における野生生物と農業の共生</p>
<p>図・写真資料</p>	<p>図1 市貝町周辺のサシバの分布</p> <p>図2 1 広域水田(農業エリア)</p> <p>図3 2 中規模谷津田(農業と生き物の共存エリア)</p> <p>図4 3 小規模谷津田(生き物エリア)</p>
<p>参考資料</p>	<p>平成24年度里なび研修会in福島県パワーポイント資料(特定非営利活動法人オオカキ保護基金)</p>